# ある東弁副会長の東日本大震災の1日

会員　下谷　收（40期）

## 忘れられない１日の始まり

2011年３月11日14時46分，私は弁護士会館６階の東弁役員室の副会長席で決裁文書に眼を通していた。

ドーンという衝撃に引き続いて，激しい横揺れが始まり，私の席の左横の棚のファイルも一斉に揺れ出した。女性職員の「キャー」という悲鳴と山田副会長の「これは大きいゾ！」という声が聞こえ，若松副会長のこうなる前に煙草をもっと吸っておくべきだったというような後悔のこもった（？）顔が目に入った。

会長室のテレビは，震源地は宮城県の牡鹿半島の東南東約130㎞三陸沖，震源の深さは約24㎞，マグニチュードは8.9（のちに9.0と訂正），太平洋プレートと北アメリカプレート境界域における海溝型地震と伝えた。震度は，一番強いところで宮城県の栗原市で震度７，会館のある千代田区でも震度５強という。

程なく，防災センターから放送があった。「身の安全を確保して下さい」に始まり，「会館内のエレベータは止まっているが，大きな損害は会館については発生していない」「都内及びその周辺の交通機関はストップしている」「落ち着いて待機し，情報を待って欲しい」など。日頃の防災訓練の成果とも言える対応が繰り返しなされた。窓外の日比谷公園には他のビルから多くの人達が出ており，不安そうな様子が見てとれた。

全ての人に興奮状態が続く中，テレビは東北地方太平洋沿岸に大津波が押し寄せ，大規模被害が発生している様子を伝えていた。火災も発生しているようで，地獄絵図のような状態となっていることがわかり，これが本当に現在発生していることなのかと思い涙が出て来た。

## 徒歩帰宅を決意する

夕方になっても会館内には多くの東弁職員が残っていたが，鉄道交通機関が全面的にストップし復旧の見通しが立っていないことが放送され，バスや徒歩等により帰宅を試みる職員が出始めた。

私も思案していたところ，自宅最寄り駅の永福町駅に近い下高井戸駅を利用している日頃から頼りになる秘書課長が「私は歩いて帰ります」ときっぱり言うのを聞き，「よし，自分も！」と決意した。

「理事者室のワインを飲みほすぞ！」と豪語している濱田副会長らを尻目に，私は７時過ぎに会館を出発した。既に廻りは暗かったが歩道は歩行者であふれ，三宅坂の交差点は，数回の信号でも渡り切れなかった。最初の計画では三宅坂から新宿通りに入って甲州街道を抜けて行こうと考えていたが，幹線道路は歩行者が多くスムーズに歩けない。そこで裏道や一方通行路で比較的人や車の少ない道をジグザグに歩いた。

印象的だったのは，飲食店がどこも一杯だったこと，駅のコンコースや階段に疲れ果てた多くの人が放心状態で座り込んでいる姿だった。ハイヒールを脱いで裸足で歩いている女性もいた。１～２万円位の自転車も，その日は完売状態だったらしい。

## ラーメン店の行列にショック

歩いているとき，私が心の支えにしていたのは「夕食は永福町駅前の大勝軒でメンマ付きラーメン1260円を食べよう」という強い思いであった。大勝軒は，昭和30年３月の開店以来ラーメン一筋50年間にわたって行列の絶えない繁盛店である。そのやみつきになる秘訣は，こだわり抜かれた煮干しスープと他店の２倍はある大盛り麺にある。私は，中学生の頃から多いときは週に４～５回通った。最近はメタボ対策の意味もあり我慢していたが，その日は無性に食べたくなって，霞が関から４時間弱，既に午後11時少し前，大勝軒のノレンとネオンサインを眼にするところまでようやく辿り着いた。

しかしである！ 地震で井の頭線が動いておらず食べに来られる人は少ないはずと踏んでいた私の甘い予想は外れ，店の外には10人を超える人がじっと佇んでいたのである！ 「何故だァ！」と心の中で叫びショック状態に陥った。だが，その列の後に並ぶ元気はその時の私にはもはやなかった。

その日，その後，何をどこで食べたか覚えていない。

一生忘れられない１日は，こうして終わった。